

てんのうじ知りたいウォーク第9弾 「四天王寺の歴史を学ぶ」



日時 平成28年4月24日（日） 13時00分催行
主催 てんのうじ知りたい倶楽部（旧未来わがまち会議）
協力 天王寺区役所

①中門（仁王門）

中門の創建年代は中心伽藍と同様の推古天皇元年（593）。金剛力士像（仁王像）がお祀りされるので、通称「仁王門」とも呼ばれています。

四天王寺境内の伽藍は度々焼失の憂き目に遭っておりますが、中門も例外ではありません。現代になってからでも、昭和9年の室戸台風により倒壊し、昭和15年に復興するも、昭和20年の戦災により焼失しました。その後昭和38年10月に復興された中門が現在の中門であり、五重塔と同じく創建当初から数えて実に8代目のものとなります。

現在の仁王像は、昭和38年に大佛師松久朋琳・宗琳の両師が手がけ献納された尊像で、重さは約1トン、身長は5.3メートルにもなり、国内に現存する仁王像の中でも最大級を誇ります。

現在の中門再建の地固め式には横綱の柄錦・若乃花の両力士が手数入りされ、当時その風格から「仁王像」と呼ばれ人気のあった潮錦が仁王像のモデルになったと伝わります。

②万灯院（紙衣さん）

万灯院は聖武天皇（701～756）のご誓願により創建されたお堂で、文化9年（1812）再建の椎寺薬師堂を昭和27年（1952）にこの場所に移築されました。

本尊は十一面観世音菩薩、左右脇侍に薬師如来、不動明王、紙衣仏、大黒天、地藏菩薩、普賢菩薩をお祀りしています。特に除災無病に靈験あらたかな紙衣仏は、五百羅漢さま（釈迦の弟子）の一人で、難病に苦しみながらも紙の衣を着て修行し「もし病苦に悩む人々が私のことを念じたなら、必ずやその苦しみを取り除こう」とご誓願を立てられた羅漢さまで、臨終の時でも不浄の世話を人にかけない「ポックリ信仰」等、独自の信仰を集めています。入口に木槌と木臼があり、木槌で痛い所をさすると治るといわれています。

③西大門（極楽門）

推古天皇元年（593）創建。現在のものは1962年、松下幸之助氏の寄贈による再建。極楽に通ずる門ということで、この門は「極楽門」と称されています。

門の両脇に漆絵の壁画が描かれており、西面は観音菩薩（南側）と勢至菩薩（北側）、東面は山越の阿弥陀如来（南側）と釈迦如来を囲む十大弟子（北側）です。この西大門と石の鳥居周辺は平安時代以降、西方極楽浄土への往生を願う浄土信仰の聖地として人々の信仰を集めてきました。西の彼方に沈む夕日を観て極楽を想う「日想観」は今も春秋の彼岸会の日に関西大門で行われています。

門柱の転法輪は、古代インドの戦車の車輪をかたどったもので、仏の教えが車輪のように回転して遠くまで広がることを表している。参詣者はこれを回転させ、直接法門に触れることにより、洗心の功德を積むことができると伝わる。仏足石・菩提樹と並んで仏陀（悟れるもの）の象徴とされる。

④黄鐘楼（北引導鐘堂）

四天王寺には1年を通じて、ご先祖供養の回向を受付けているお堂が三ヶ所あり、黄鐘楼（通称北鐘堂）はその一つ、四天王寺にとって重要なお堂です。また、北鐘堂は鐘を撞く鐘楼としても有名です。その鐘は建物の二層目に吊り下げられていて、外側から見るとはできませんが、一層目の天井から垂れ下がっている綱を引く事により音が鳴ります。

実は北鐘堂の鐘の音は釈迦修行の地・祇園精舎にあった鐘の音と同じ音階を持つといわれており、この鐘の音は遥か極楽浄土にまで響き渡り、このお堂でご供養を受けた諸霊を引導されるということで多くの信仰を集めています。

⑤六時礼讃堂と石舞台

(六時礼讃堂)

六時礼讃堂は「六時堂」と通称され、弘仁7年(816年)に伝教大師最澄により創建されました。その建築に際して、比叡山延暦寺根本中堂を摸して建立されたと伝わります。現在のお堂は、享和元年(1801年)に雷火により焼失した際に、同じく最澄創建の元和9年(1623年)に再建されていた椎寺薬師堂を、文化8年(1811年)に六時堂跡に移築したものです。そして昭和20年の大阪空襲を耐え抜き、昭和29年(1954年)に国の重要文化財の指定を受けました。

本尊は薬師瑠璃光如来。四方に四天王をお祀りします。そして薬師如来の脇侍と謂えば日光・月光菩薩なのですが、ここでは非常に珍しい羅睺星・計都星をお祀りしています。

また現在では、通年にわたって、ご先祖供養・納骨回向・水子供養・人形供養・祈祷等を行う四天王寺を代表する特別回向所であり、修正会・聖霊会などの大法要は六時堂で執り行われるなど、寺内で重要な位置を占めるお堂の一つです。

(石舞台)

六時堂前に架かる石橋の上に組まれたこの「石舞台」は、住吉大社の石舞台、巖島神社の板舞台と並ぶ日本三舞台のひとつで、国の重要文化財に指定されています。元は白木造りでしたが、文化5年(1808)年、大阪の材木問屋の寄進による再建の際、御影石造りに変更されました。橋の欄干に「舞臺講」の文字があり、材木問屋講の講元四名、講中70人の名が刻まれています。

石舞台では、毎年4月22日、聖徳太子の御霊をお慰めする「聖霊会」が厳修されます。この法要は、四天王寺で最も重要な行事で、六時堂内中央に太子が自らの姿を楊の枝で写されたと伝わる楊枝御影(摂政像)をお祀りし、石舞台上で四天王寺一山衆僧による四箇法要と天王寺楽所による舞楽が奉納されます。

⑥亀井堂

推古天皇元年(593)創建。昭和30年(1955)再建。お堂の西側は「亀井の間」といわれ、中央に大きな亀の水盤があり、亀の口より昼夜を分かたず霊水を出す故に、亀井水と呼ぶ。

この霊水は、金堂の地下にある青龍池から湧き出す霊水「白石玉出の水」とよばれ、各お堂にて回向(供養)を済ませた経木を流せば極楽往生がかなう「亀井の水」として、四天王寺独特のものとして信仰を集めてきました。本尊は地藏菩薩。

また、堂の東方「影向の間」には、中央に聖徳太子が青龍池に姿を映して楊の枝で描かれたという楊枝の御影、右に馬頭観音、左に地藏菩薩を安置する。楊枝の御影は毎年4月22日の聖霊会では本尊として六時堂にお祀りされます。

お堂の隣には、近畿三十六不動第一札所の亀井不動尊も祀られています。

⑦石神堂(牛王尊)

推古天皇元年(593)創建。四天王寺草創時、建築資材である石や材木を運搬した牛が、伽藍が完成するや否や化して石となったと伝えられ、堂内床下には牛王尊の巨石が安置されている。

後世、牛は草を食べることから、転じて「子供の顔にできる瘡(おでき)をとってくれる」との信仰を生み、病氣平癒を祈る人々によって、牛の絵馬が数多く奉納されている。

⑧猫の門

創建年代未詳。第二次世界大戦による焼失以前は、聖霊院北西の築地塀に北面していた。梁上に眠り猫の彫刻があり、日光東照宮の眠り猫と一对をなす左甚五郎の作として有名であった。

伝説では、この猫が非常によくできていたため、正月元旦の朝に三度鳴くと言われ、参詣者は常に仰ぎ見たと記されている。

現在の門は昭和54年10月の再建で、眠り猫の彫刻は、中門と同様に大佛師松久朋琳・宗琳の両師の謹彫である。

⑨虎の門と聖霊院

(虎の門)

創建年代不詳。昭和54年10月の再建。聖霊院南西の築地塀に西面し、梁上に虎の彫刻があることから、「虎の門」と呼ばれている。現在の門は猫の門と同様に大佛師松久朋琳・宗琳の両師の謹彫である。

(聖霊院・太子殿)

後花園天皇(1419～1470)の勅願により建立。前殿は昭和29年(1954)再建、奥殿は昭和54年(1979)再建。聖霊院は、聖徳太子の御霊を鎮魂するために建立されたお堂で、前殿には太子十六歳孝養像(秘仏)と太子二歳像、四天王像が奉安され、奥殿には太子四十九歳摂政像が祀られています。

また、奥殿内陣(基壇の地下)には、中央に六観世音菩薩像(智慧・子育・施薬・厄除・水子・極楽の六種の観音像)を安置し、周囲の壁面には信徒の方が祈願や供養のために永代奉安される太子六観音像をお祀りしています。

⑩願成就宮(物部守屋の祠)・経堂と絵堂

奥殿の西側には願成就宮と呼ばれる物部守屋の御霊が鎮座する祠があります。

用明天皇2年(587年)に聖徳太子の父君であられる用明天皇が崩御し、それを切欠に蘇我氏と物部氏との間で大和政権を二分する一族の運命をかけた激しい武力衝突となりました。一般には「丁未の乱」と伝わりますが、氏族の名を取って「蘇我・物部の合戦」と呼ばれる戦乱です。

物部守屋は一族と共に滅ぼされましたが、聖徳太子は四天王寺を建立する際に、守屋の御霊を寺域に祀って物部氏の家来達を寺の公人として使役されました。太子のこの廣大無辺な慈悲に対し、守屋の御霊は感激し、未来永劫この寺を守護し、訪れる庶人の願いを成就し円満せん事を誓われたといわれます。故にこの守屋祠は、「願成就宮」とも呼ばれます。

祠の中には物部守屋と、守屋と共に疫病流行の原因が蘇我氏の仏教信仰のせいであると奏上した弓削小連、中臣勝海の3人の鎮魂の御札が祀られています。

その北側、東西には小堂があり、西側が経典を納める経堂で、東が絵堂です。絵堂には、太子の一生の事績を描いた杉本健吉画伯による壁画が奉納されており、毎月22日の太子月命日に一般公開されています。